

LIBRARY

鳥取大学附属図書館報

134

2020.Oct.

INDEX

- 01 **巻頭言**
我々は、本を読む必要が
あるのだろうか？ 安延久美
- 03 **私の選んだこの一冊**
『情報の文明学』 大森幹之
『バッグをザックに持ち替えて』 岩永史子
- 07 オープンアクセス方針の策定について
- 09 附属図書館の新型コロナウイルス
感染症対応について
- 10 トピックス

巻頭言

我々は、本を読む必要があるのだろうか？



安延 久美 (やすのぶ くみ)
国際交流センター長、農学部 教授

現在のように、デジタルで情報がすぐに手に入る時代に、本を読むということはどういう意味をもつのだろうか。私個人の経験をもとに、本を読むことの意味を考えてみたい。

子供の頃から本は身近にあった。本を読むのが好きだったのかというと、違う。母は私に玩具やお菓子を買ってくれることはなかったが、本屋さんに行くと、どんな本も無条件に買ってくれたのだ。だから、本を読むのが好きというよりは、本屋さんに行くのが好きといったほうが良い。まあ、「本を読む＝良いこと」と刷り込まれてしまったようなものだろう。高校卒業までには(理系にしては)かなり多くの文学書に目を通していった。では、本を読むのが好きなのか否かと問われると、なんだか答えに窮するのである。

その状況が変わるのは大学に入ってからかもしれない。

大学生の頃というのは、おそらく今の大学生もそうであるように、(勉強の悩みよりは)恋愛の悩み、それに伴う孤独感、将来への漠然とした期待と不安、つまり「何者でもない自分自身への焦燥」のようなものに突き動かされる。特に気持ちが落ち込んだときに、私は本に救われたという思いがある。この当時、私はいったん気に入った作家があると、その作家の大方の小説や随筆など読み漁った。そこに象徴されていた多様な生き方、多様な価値観に救われたのではないかと思う。

中学か高校の国語の先生から、小説を読むことは「追体験」をすることだと教わったことを思い出す。小説の中の他者の経験や感情を追体験することで、自身の視野が広がることで、自身の小ささを知ったといえる。その後も現在に至るまで、本を読むことによって気持ちが救われた経験は数知れない。





ところが、書籍をたくさん読んで、気持ちが晴れることがあったとしても、自分が何者であるかの答えを簡単に教えてくれるわけではない。答えを求めて、若い頃には自己啓発本にはまったこともあった。しかし、自己啓発本の読後は、どちらかというとき空しい結果に終わる。「自己啓発本を読む時間があつたら自己啓発すれば！」と自分にツッコミを入れてしまうからだ。

結局、偶然、手にとった本と、その時の自身の状況や環境がシンクロしたときに、その書籍の「何か」が自分自身の軸として形成されていくのではないだろうか。答えを探して読むというよりも、偶然、出会ってしまった本によって、自分自身を知り、自身の生きる姿勢も決めることもあるのだ。この時、その書籍との出会いが必然になる。もちろん音楽や映画などによって自分の考え方が影響を受けるこ

ともあるのだが、価値観がグラグラと揺り動かされるような体験は本でしかありえなかった。自分自身を深く知るためには、本を読むことが必要なのだと思う。私の30代～40代は、給料の三分の1くらいは書籍購入にあてるほど、本を求めていたと思う。出会って良かったと思う書籍は何冊かあるが、一つあげるとすると、岡部伊都子さんの随筆がある。ご自身の戦争体験をもとに書かれた随筆に、「無知であることの罪」を教えられた、という作品を読んだときの衝撃は、今も私の中に残っている。

さて、タイトルの答えであるが、私にとってはもちろんイエスである。皆さんの答えはどうだろうか。ただし、イエスカノーかの答えを知るためには、多くの書籍に触れ、偶然手にとったそれが必然の出会いになるという瞬間を体験する必要がある。



『岡部伊都子作品選・美と巡礼』
岡部伊都子著
藤原書店，2005年

私の選んだこの一冊

『情報の文明学 / 梅棹忠夫著』



大森 幹之 (おおもり もとゆき)
総合メディア基盤センター 教授

古くはIT (Information Technology) と呼ばれた情報技術、近年では通信も加えてICT (Information and Communication Technology) と呼ばれる情報通信技術は、今や我々の生活には欠かせないライフラインの1つになりつつあります。また、情報通信技術は産業に活用され、第3次産業革命を起こしたとも言われています。今では、ビッグデータやAI (Artificial Intelligence) により第4次産業革命が起こりつつあるとも言われています。

本書はコンピュータが普及する以前の1960年代に著者が発表した論文「情報産業論」などを元にしており、1980年代に最初に発行された本です。現在の高度情報化社会をいち早く予見していたとも言われ、著者は「情報産業」という言葉の生みの親とも言われています。やや古い本ではありますが、21世紀の今読んでも非常に興味深い内容となっています。



『情報の文明学』
梅棹忠夫著
中央公論新社, 1999.4

中央図書館開架 007.3:Joh



例えば、情報には有益な意味のある情報と無意味な情報があると論じています。これは近代における情報学で厳密に定義された「データ」と「情報」の違いについて論じていると見ることもできるかもしれません。また、一見無意味である情報にも別の視点から観測すると意味が出てくる可能性についても論じています。そして、この一見無意味に見える情報を体にとって栄養がほとんど無いと考えられているコンニャクに例えて論じている点も面白い点です。

また、情報の価値に関する議論も興味深いです。物質でもなく形もない情報の価値は、どうやって決まるのでしょうか。過去には、また今も少なくない企業では、情報の作成に要した人の数と時間で情報の価値が決められていました。しかし、この価値の決定方法は第2次産業

革命からの悪いなごりであると著者は論じます。本書で著者は、情報の価値は情報を提供する者と享受する者の格で決まるという「お布施理論」を主張しています。お坊さんへのお布施の額の決定プロセスを分析し、それが情報の価値の決定プロセスと同一だということです。

この様に、著者はもともとは情報工学の専門家ではありませんでしたが、生態学から文化人類学、情報学など幅広い分野に知見をお持ちです。そのため、本書は様々な角度から「情報」について論じられており、文系、理系を問わず幅広い分野の方にお薦めしたい一冊です。



『バッグをザックに持ち替えて / 唯川恵著』



岩永 史子 (いわたが ふみこ)
農学部 講師



『バッグをザックに持ち替えて』

唯川恵著

光文社, 2018

中央図書館開架 915.6 : Bag

今年の正月を完全なる寝正月で過ごし、その間なぜか、山岳ドキュメンタリー映画を3本も立て続けで見ってしまった。本稿では映画をテーマとしないのでそれらの記述は割愛するが、その流れで本書に興味を惹かれ入手した。半年ほど経ったところへ本推薦図書の依頼があったので紹介することとした。

本書では主人公(=著者)が田舎への転居をきっかけに登山を始め、文中では“リーダー”と称される夫や登山仲間と鍛えられたり、支えられたりしながら登山にハマっていく様子が描かれている。アウトドアに親しんでこなかった著者が浅間山への登山を目標として、自宅近くにある低山へ週に何度も登るトレーニングを始め、筋肉痛が辛い、もう二度と登らないと嘆きつつ、登山の楽しさを目覚めていく。そのうち、一か月に二、三度は自宅近くの浅間山へ登るようになり、「無理、無理、無理！」と絶叫し、膝をガクガク言わせながら上高地や八ヶ岳連峰、富士山へチャレンジし、ついに浅間山の冬山登山もやってしまう。著者の成長ぶり(?)はすさまじく、本書終盤には「エベレストが見たい！」と、エベレスト・ベースキャンプ(登山道の入り口)を経由してカラパタールに至るトレッキングにも行く。ちなみに「トレッキング」と一語で記してあるが、標高5,545 mの高地への道のりである。序盤で著者が登った

浅間山が標高2,568mというから、標高だけを比べても随分な違いである。このように本書の大きな流れとして、様々なレベルでの登山体験があり、登山をこれまで楽しんできた人ももちろん、全く触れてこなかった人も感嘆しながら著者ののめりこみようを追ってしまうだろう。

本書で個人的に最も興味深かった点を挙げるとすれば、それは登山に取り組む際の入念さである。「登山」という体力的にきつい活動への準備にとどまらず、トイレや食事、活動中の人間関係や設備利用なども含めた野外で起こる様々な不便への対応なのだが、実はこれらは「登山をいかに安全にするか」という、本書のもう一つのテーマとも言える。私は3,000m級への登山を試みたこともないが、調査や実験をいかに安全に（あるいは無事に？）終わらせるか、と考えることはよくある。例えば、真夏の炎天下に野外で計測や試料採取をすることがあるが、疲れると集中力も低下し作業の精度も落ち

るため、機器の準備や体調管理に気を配る。これらは調査中におこりうる不便を軽減する作業である。野外へ出る機会に乏しいという人も、計画をたてて何事かに取り組むということはあるし、様々なことを予測して対策を練ることの大切さは共有できるのではないか。

このように登山への著者の強烈なハマりっぷりは、日常生活では「超」が付くインドア派の私にとって感嘆以外のなにものでもなく、上記のあらすじを知っていても本書の魅力は減じないと思う。軽妙な文体で登山やアウトドアの楽しさを示しつつ、様々な心構えを優しく教えてくれる一冊である。興味があれば、手に取ってみてほしい。





オープンアクセス方針の 策定について

令和元年度より、鳥取大学の基本理念「知と実践の融合」に基づき、オープンアクセス方針、オープンアクセス方針実施要領および鳥取大学研究成果リポジトリ運用要項としてとりまとめ策定する検討を重ねておりました。このたび、学長の裁定を得て成立することとなりましたので、お知らせいたします。

令和2年 1月15日
学 長 裁 定

鳥取大学オープンアクセス方針について

（目的）

1. 鳥取大学（以下「本学」という。）は、鳥取大学の基本理念「知と実践の融合」に基づき、開かれた大学としてその研究成果を学内外に広く公開し、学術研究の発展に寄与するとともに、地域・社会への説明責任を果たすことを目的として、オープンアクセスに関する方針を定める。

（研究成果の公開）

2. 本学は、出版社、学協会、学内部局等が発行した学術雑誌に掲載された本学に在籍する研究者（以下「研究者」という。）の公的研究資金を用いた研究成果（以下「研究成果」という。）を、「鳥取大学研究成果リポジトリ」（以下「リポジトリ」という。）によって公開する。ただし、研究成果論文等の著作権は本学には移転しない。

（研究成果の提供）

3. 研究者は、研究成果について、共著者の同意を得た上でリポジトリによる公開が可能な版をできる限り速やかに本学に無償で提供する。

（適用の例外）

4. 前項の規定に関わらず、著作権等のやむを得ない理由によりリポジトリによる公開が不適切である場合、本学は、その研究成果を公開しない。

（適用の範囲）

5. 本方針施行前に出版された研究成果や、本方針施行前に本方針と相反する契約を締結した研究成果には、本方針は適用されない。

（その他）

6. 本方針に定めるもののほか、オープンアクセスに関する必要な事項は、別に定める。



オープンアクセス方針実施要領 について

オープンアクセス方針実施要領は前頁オープンアクセス方針の内容を具体的に説明するものです。
オープンアクセス方針、オープンアクセス方針実施要領および鳥取大学研究成果リポジトリ運用要項は鳥取大学研究成果リポジトリのドキュメント内で公開・掲載されています。教職員・学生の方で、論文・研究データ・講義資料などの研究・活動成果をお持ちの方は、ぜひご一読いただき、鳥取大学研究成果リポジトリへの登録をお願いします。

出版社・学会が著者に認める権利の一例および各版のリポジトリ登録の可否について

出版者	投稿版、修正版	著者最終稿	出版社版
Elsevier	公開可	制限付で公開可 エンバーゴ 1~3 年 クリエイティブコモンズのクレジット表示	×
Wiley	公開可	制限付で公開可 エンバーゴ 1~4 年	×
Springer	公開可	制限付で公開可 エンバーゴ 1 年	×
Nature	公開可	制限付で公開可 エンバーゴ半年	×
ACS (American Chemical Society)	制限付で公開可 ・書面での許可必要 ・ACS の倫理ガイドラインに違反しないこと	制限付で公開可 所属機関において OA 化が要求されている場合、エンバーゴ 1 年	×
JBC (Journal of Biological Chemistry)	公開可	アクセプト後すぐにリポジトリに登録可	12か月後に登録可

※その他、オープンアーカイブ等による出版社版の公開も可能な場合があります。

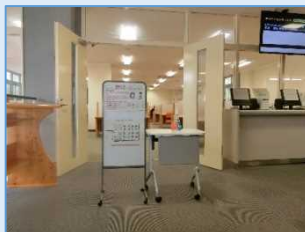
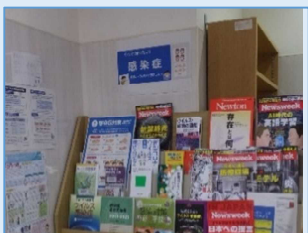


鳥取大学研究成果リポジトリ ”<https://repository.lib.tottori-u.ac.jp>”

附属図書館の新型コロナウイルス感染症対応について



3月	ラーニングcommons、グループ学習室、多目的ルーム、PCルーム等の利用を禁止または制限(3日) 学外利用者の入館利用等を一部制限(〃) 貸出資料の返却期限を延長(〃) 休日、夜間開館等の開館予定を変更(26日) 閲覧室座席等の利用を停止(30日)
4月	学外利用者の入館利用を停止(11日) 自宅学修・研究支援情報等を附属図書館HPに掲載(21日) 情報リテラシ、レポートの書き方講習会、中央館利用案内等のオンラインコンテンツを作成、公開(〃) 飛沫感染防止のためパーティションをカウンターに設置
5月	カウンター前等に足跡マークの貼付
6月	閲覧室座席の利用を一部再開し、定期的な座席消毒 および 閲覧室等の換気を実施(18日) 中央館の学外利用者の入館利用を一部再開(〃) 非接触型温度計を導入 学生選書会をオンラインで実施(お家でお気楽プチ選書)
7月	自動手指消毒器を設置 中央館の学外利用者の入館利用を停止(4日)
8月	中央館蔵書リユース展を予約・入換制で実施(3～7日) WEBオープンキャンパスによる中央館館内ツアー動画の公開(11～14日)
	入館ゲートにサーマルカメラを設置予定



新型コロナウイルス感染症対応のため、鳥取大学附属図書館中央館および医学図書館において、状況を見極め注視しつつ対応をしております。

今後も利用者の皆様のご理解・ご協力のもと取り組んでまいります。

最新情報および詳細な対応等は附属図書館HPに掲載し、随時更新中です。

eラーニングコンテンツでのオンデマンド講義を公開

例年対面で行っている「レポートの書き方講習会」や「図書館ツアー」等の各種講習会を、新型コロナウイルス対策により遠隔講義用に録音してmanaba上で公開しました。こちらの附属図書館コースは学生だけでなく教職員にも公開しており、授業内で利用したいという声も多数いただきました。

また、今年は原則オンライン講義となったことで、レポート課題が多く出されたようで、「レポートの書き方講習会」利用者がStep1、2合わせて2800名を超える結果となりました。講義内容だけでなく、図書館サービス等についての質問も多く寄せられたため、Q&Aリストも公開しております。いつでも復習できるコンテンツとして是非ご活用ください。



manaba - 附属図書館コースURL:

https://manaba.center.tottori-u.ac.jp/ct/course_63104

附属図書館ホームページ英語版リニューアルのご案内

附属図書館ホームページの英語版を今年度7月に大幅リニューアルしました。以前よりあった図書館トップページに加え、各主要ページの英語案内を公開しています。附属図書館の基本的な利用方法や、電子資料・データベース、文献・貸借依頼(ILL)、希望図書購入依頼(学生限定)、図書購入依頼(教員限定)等の各種サービス・案内をご確認いただけます。英語の方が確認の際に都合がよい学生や教職員の皆様へご案内いただき、ご活用いただければと思います。なお、図書館蔵書検索(OPAC)も、上部メニューの言語切り替えで「English」を選択すると英語表示での検索が可能です。



附属図書館ホームページ英語版URL:

http://www.lib.tottori-u.ac.jp/index_e.html

※附属図書館ホームページ上部にある「English」からも、表示の切り替えが行えます。




編集・発行

鳥取大学附属図書館

〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101番地

 <http://www.lib.tottori-u.ac.jp/index.html>

 <https://www.facebook.com/TottoriUnivLib/>

 https://twitter.com/TottoriU_Lib